

ラッセル的一元論としての素朴実在論 Naive realism as Russelian monism

高村夏輝¹

Natsuki Takamura

¹ 埼玉県立大学保健医療福祉学部

Abstract

In recent years, Russelian Monism has received a great deal of attention. Russelian Monism aims at solving the problem of phenomenal consciousness, and includes Russelian Physicalism, Panpsychism, and Panqualitism. In this paper, I point out that among these positions, Panqualitism is the most convincing, but it fails to solve the structural mismatch problem. I then suggest that we can solve that problem by using the naive realistic ideas derived from Bertrand Russell's sense-data theory.

1 ラッセル的一元論とは何か

近年、現象的意識の問題に対する取り組みとして、ラッセルの中性的一元論¹からヒントを得た「ラッセル的一元論」(Russelian Monism、以下「RM」と略す)というアプローチが注目されている²。本稿の目的は、様々なRMのうち、最も有望だと認められる立場はどれかを特定することである。

RMは、次の二つの主張を支持する立場として特徴づけられる³。

(1) 物理学についての構造主義：物理学、あるいはそれに付随する諸科学は、世界の関係的・構造的特徴のみを記述している。あるいは、傾向性についてのみ語っている。

(2) 「計り知れぬもの」の経験関連性：物理学によっては語られることのない、対象の内在的性質、あるいは傾向性の定言的基盤⁴である本体(Quiddities)となる、「計り知れぬもの」(Inscrutables)が存在し、それが経験の現象的性質(Phenomenal properties)あるいは原・現象的性質(Proto-Phenomenal properties)の存在根拠となっている。

¹ Russell(1927a); (1927b).

² 代表的な論文集・著作として、Alter and Nagasawa(2015), Goff(2017), Pereboom(2011), Rosenburg(2004), Nagasawa(2008), Stoljar(2006), Strawson(2003a);(2006) などがある。

³ Alter and Nagasawa (2012), p425を元にして、彼らが二つに分けている項目をまとめて(1)とした。

⁴ 傾向性は、ある刺激または入力に対する反応あるいは出力の組み合わせで定義される性質であるが、通常これはそうした組み合わせによらずにその同一性が定まる性質によって実現されると考えられる。たとえばガラスのもろさという傾向性は、その分子構造によって実現されるが、分子構造そのものは傾向性ではない。「傾向性の定言的基盤」とは、傾向性を実現する、それ自体は傾向性ではない性質のことである。

物理学についての構造主義と、それが「計り知れぬもの」について語り残さざるを得ないという見解をどのように正当化すればよいだろうか。ラッセル自身は知覚の因果説から一種の間接知覚説をとることでこの見解を正当化したが、(1)を支持するために間接知覚説をとる必要はない。直接知覚説を採りつつ、デイヴィッド・ルイスの「ラムジー的謙虚さ Ramseyan Humility」という見解⁵に依拠して物理学についての構造主義を正当化することもできる。また「構造的・関係的・傾向的／内在的・定言的」の区別に対する疑念が存在するが、この点については本稿では立ち入って検討することはしない。いずれかの区別が可能であり、物理学についての構造主義の主張が正しいと前提したうえで議論を進める⁶。

RMが注目される背景には、意識のハードプロブレムを物理主義が解決できていない現状がある。思考可能性論証や知識論証が正しいとすれば、現象的意識は物理的なものの総体に論理的に付随せず⁷、物理主義は偽であると思われる。RMは、通常の物理的性質に加え「計り知れぬもの」まで付随性の基盤に加えれば、現象的意識はそれにより形而上学的に必然化されるのだとすることで、それらの反物理主義的論証に答える。そしてその「計り知れぬもの」が構造的・関係的・傾向的な物理的性質の本体、定言的な基盤となっているとすることで、二元論に陥ることを回避しつつも心的性質に因果的効力を認めることができる。RMは物理主義と二元論の対立を止揚する立場として支持されるのである⁸。

2 ラッセル的一元論の導出

物理主義を批判する代表的な議論である思考可能性論証から、どのようにRMが導出されるかを見てみよう。思考可能性論証は、現実世界における物理的真理がすべて正しいが、経験の現象的性質についての真理が偽であることの思考可能性（ゾンビ世界の思考可能性）から、物理主義が偽であることを主張する。しかしこれに対しては、「水はH₂Oではない」は思考可能だが形而上学的には成立不可能であるという反論がなされる。この反論を克服するためには、一次内包と二次内包を区別して思考可能性論証を定式化する必要がある。そうするとき、以下のような議論によって「物理主義が偽である、またはRMが真である」ことが帰結する。

1. P & ~Q は思考可能である。
2. もし P & ~Q が思考可能であるなら、P & ~Q は一次内包で成立可能である。
3. もし P & ~Q が一次内包で可能ならば、P & ~Q が二次内包で成立可能であるか、または RM が真である。
4. もし P & ~Q が二次内包で成立可能ならば、物理主義は偽である。
5. 物理主義は偽であるか、または RM は真である⁹。

この議論の結論は、あくまで物理主義が偽であることと RM が真であることの選言である。しかしこの結論が真でありかつ RM が偽である場合、物理主義も偽であり、二元論しか可能性は残らない。一方、RM が

⁵ Lewis(2009).

⁶ たとえば「球形である」という性質は物理的な性質であるが、その性質を持つ物体にとって内在的であるとして、物理学についての構造主義に対して批判が出されるかもしれない。Pereboom(2011)はこのような批判に対し、部分間の相互関係によって構成される性質は構造的性質であるとして応えている。

⁷ 付随性とは性質間の決定関係であり、ある対象が性質 B を持つときには必ず性質 A も持つと言えるとき、「性質 A は性質 B に付随する」と言う。付随性の定義に含まれる必然性が、論理的必然性であるばあい、それは「論理的付随性」と呼ばれる。

⁸ Chalmers (2016a). ミクロな「計り知れぬもの」と現象的性質の関係を、前者が後者を構成するとせず、前者から後者が創発するとする RM の立場もありうる（創発的汎心論）が、それは二元論の困難を引き継ぐことになる。本稿では検討対象としない。

⁹ Chalmers(2010), p 152. に基づく。ここで「P」は宇宙内のすべてのマイクロ物理的真理の連言であり、「Q」は任意の現象的真理である。また 4 と 5 で言及されている物理主義は、チャルマーズの原文では「唯物論 materialism」である。

真であるときには、二元論は偽であることになるが物理主義が偽であるとはかぎらず、後に見るように、物理主義の一形式として RM を展開することも可能である。したがってこの結論によって、二元論に問題があり現象的意識に関する何らかの説明が必要だと認める論者にとって、RM が魅力的な代案であることは示されている。

ここでなされている議論を敷衍してみよう。一次内包では、ゾンビ世界は思考可能でありかつ形而上学的に成立可能でもある。しかしここから、二次内包でもゾンビ世界が成立可能であることまでは必ずしも帰結しない。もし二次内包でも成立可能ならば、物理主義は偽である。しかし二次内包で成立不可能なら、ゾンビ世界は、一次内包で思考可能であるにもかかわらず形而上学的には成立不可能である。RM は、この思考可能性と形而上学的成立不可能性の組み合わせを以下のように説明する。

現象的概念の一次内包と二次内包は一致し、つねに同じ現象的性質を指示する。しかし物理的概念はそうではない。その一次内包は他の物理的性質との関係構造、ないし他の物理的性質を引き起こす傾向性（チャルマーズは「構造・力学的プロファイル」と呼ぶ）のみを取り出す。ある関係構造、傾向性は、異なる可能世界において、異なる内在的性質・定言的な基盤によって担われていることがありうる。一方、その二次内包はすべての可能世界において、現実世界でその関係構造を担っている内在的性質、傾向性の基盤を取り出す。この内在的性質、傾向性の基盤（すなわち「計り知れぬもの」）が現象的性質を必然化するならば、ゾンビ世界は二次的には成立しない。RM はこの可能性の指摘を通じて導出される¹⁰。

RM は、「計り知れぬもの」がどのような性質であるとするかに即して区別される。まず、「計り知れぬもの」自身が一種の現象的性質であるならば、その立場は一種の汎心論 Panpsychism になる。これに対して、「計り知れぬもの」は、現象的性質を必然化するが、それ自身は現象的性質ではない（そのような性質は「原・現象的性質 Proto-phenomenal property」と呼ばれる）とする立場は「汎原心論 Panprotopsychism」と呼ばれる。そして汎原心論のうち、「計り知れぬもの」は質的特徴（これを以下では「現象的質 phenomenal qualities」と表記する）をもつが、意識主体や作用という側面を持たないとする立場は「汎質論 Panqualitism」と呼ばれる。一方、「計り知れぬもの」は現象的質でもなく、また主体によって意識されることも本質的要件として含まず、むしろ典型的な物理的性質と共通性があると考える立場は、「ラッセル的物理主義 Russellian Physicalism」と呼ばれる。

以下では、RM の代表的立場である「ラッセル的物理主義」、「汎心論」、「汎質論」を批判的に検討する。

3 ラッセル的物理主義

ラッセル的物理主義は、現象的性質が物理的なものの内在的性質によって必然化されるとする点で RM の一種でありつつ、同時に物理主義でもあろうとする立場である。すなわち、現象的性質が論理的に付随する基盤であるとされる「計り知れぬもの」を物理的性質であるとするだけで、物理主義という形而上学的立場を維持しようとする。ラッセル的物理主義者は、物理学についての構造主義と、「計り知れぬもの」の経験関連性

¹⁰ Rosenberg(2004) は思考可能性論証を用いず、現象的特徴が内在的性質であることと、物理学の構造主義から物理主義の否定を導き出している。したがって RM を支持するためには、必ずしも思考可能性論証（および知識論証）を用いる必要はない。ただしこの場合、現象的意識の問題の解決につながるかどうかとは独立の見解として、物理学についての構造主義を正当化する必要がある。これに対して、思考可能性論証や知識論証の妥当性を受け入れるならば、それによって提起される現象的意識の問題に対する解決策の一部として、物理学についての構造主義を主張し正当化することができる。RM がどちらの道を選ぶべきかについては、最終的に提案される現象的意識の問題に対する解決策との整合性によって決定するべきである。そしてそうした観点からすれば、ローゼンバークと同様の方法を取るべきだと思われなくもないが、現時点では比較的異論の少ないと思われる、思考可能性論証を用いて RM を導入しておくこととする。

という RM を特徴づける二つの主張を、思考可能性論証や知識論証によっては物理主義を論駁できないことを示すものとして理解するのである。

ラッセル的物理主義が抱える困難は、それを一種の RM として通常の物理主義とは自らを区別する一方で、汎心論や汎質論とも異なる一種の物理主義でありつづけるというその立ち位置を保持できないことにある。

RM の一種であるかぎり、ラッセル的物理主義は「物理学が語っているのは实在の关系的・構造的性質、傾向性だけである」という見解を支持する。そして RM を支持するかぎり、これは今後マイクロ物理学がいかに進歩しようとも、物理学にとって変化することのない本質的な特徴であり続ける、とされるはずである。たとえば物理学についての構造主義を「ラムジ的謙虚さ」によって支持するならば、今後理論がいかに発展しようとも、理論用語が作る関係構造がより精緻に描き出されるようになるだけであり、物理学は内在的性質について語るようにはならない。したがってラッセル的物理主義者は、「計り知れぬもの」がいずれは物理学で語られることを理由として、それを「物理的」性質であるとするにはできない。したがって、何らかの別の手段によって「計り知れぬもの」を物理的性質として特徴づけなければならない。

ラッセル的物理主義を支持するストルジャーは、「物理的」という用語の意味について、「物理学理論において語られる」という意味と、「物理的対象である」という対象に定位した意味を区別する¹¹。前者の意味での「物理的」は、物理学の理論に登場する概念の意味としての性質であり、RM が主張する構造主義の特徴が当てはまる关系的・構造的性質、傾向性でしかない。しかし後者は「物理的である」を一種の自然種名と見なし、その種に属する対象が持つ本質的性質を「物理的性質」と呼ぶという用法であり、この意味でならば確かに「計り知れぬもの」も物理的であるということができる。

しかしこのようにして一種の「物理主義」としての RM を主張するとしても、それは言葉の使い方を変えてそう呼べるようになっただけであり、主張されている内容は通常の物理主義とは大きく異なるものとなる可能性がある。「物理的」という用語の意味が拡張された結果、通常は物理的ではないとされる性質まで「物理的」であると言えるようになるからである。たとえばストローソンは「物理的」という語についてストルジャーと同様の区別をし、「計り知れぬもの」を物理的性質であるとする¹²。しかし同時に「計り知れぬもの」をマイクロな現象的性質であり、マイクロで刹那的な意識主体を伴うと主張する。つまりストローソンは汎心論を支持するのであるが、ストルジャーの方法はこのような立場を排除しないのである。ストローソンは「唯物論」「物理主義」という旗印を通常の物理主義者から奪還するために、一種の汎心論である自説こそ「真の物理主義」「本当の唯物論」であるとする。そうしたねらいで「物理的」の意味を拡張するのであれば、それはそれで一つの立場である。しかし、現象的意識を实在の基礎的特徴とせず、現象的ではない物理的性質で説明しようとするラッセル的物理主義としては、ストルジャーの方法は役に立たない。

ラッセル物理主義を支持するバーバラ・モンテロは次のように論じる¹³。ラッセル的一元論を一種の物理主義と見なせるかどうかは、「計り知れぬもの」を現象的性質を説明するためにのみ措定するかどうかにかかっている。もし「計り知れぬもの」が現象的性質を説明するためにのみ措定される原・現象的性質としてしか規定されえないものであれば、それは物理主義者が受け入れ難い性質である。そこで、「計り知れぬもの」は、一定の結合関係に立った時に現象的性質を実現させはするがそれ以外の役割をも果たすと主張することで、現象的性質との関係とは独立に基底可能な性質として理解できるようにする。

モンテロがここで「計り知れぬもの」に与えるのは、具体的な世界を存在させるようにするという役割である。物理科学についての構造主義を主張するラッセル的一元論は、物理学は实在の抽象的な関係構造しか記

¹¹ Stoljar(2001); (2006).

¹² Strawson(2003a); (2006).

¹³ Montero(2015).

述しない。したがって、テーブルや椅子などの具体的な物理的個物についても、物理学的に捉えられるのはその抽象的な関係構造のみである。具体的な個物が具体的に現に存在しているということそのものは、物理学の理論に登場する関係・構造的性質や傾向性によっては説明されない。それを説明するのが「計り知れぬもの」である。計り知れぬものは一種の内在的性質であり、それが例化されることにより、物理学的に明示的に語られる関係構造や傾向性も例化されることになる。そうして、この具体的な例化された世界の一切が初めて実在するにいたるのである。

ここで「計り知れぬもの」はまず、それが例化されることによって具体的な世界を成立させる内在的性質として規定される。そして「計り知れぬもの」の例が一定の結合関係に立つときには、人間の身体のような具体的物体を存在させるだけでなく、現象的性質を実現するが、そうでないときには心的性質をもたないテーブルや椅子を存在させるだけである、とされる。現象的性質を実現させるという理由以外で「計り知れぬもの」を措定し、かつ現象的性質を例化させることはその役割の一部でしかないため、「計り知れぬもの」にとって現象的性質との結びつきは本質的なものではないとすることができる。また、モンテーロはある性質が物理的であるということを、「心的ではないこと」として規定する。したがって、ここで措定された「計り知れぬもの」を物理的性質と認めることができ、このラッセル的一元論は一種の物理主義とすることができる。これがモンテーロの主張である。

私見によれば、このモンテーロの試みは成功しているとは言い難い。物理学は実在の関係・構造的性質や傾向性についてしか語っていないため、具体的世界の成立にはそこに登場しない何らかの性質が必要である、という主張は正しい。しかしここから必要性が主張できるのは、何らかの内在的性質が存在し、それが例化されることで具体的世界が成立するということである。その具体的世界で現象的性質が実現していることまでは帰結しない。その上で、もしどのような内在的性質であれ一定の結合関係に立つならばかならず現象的性質を実現し、それ以外の結合関係の場合は現象的性質は実現されない、と主張できるならば、モンテーロの目論見は達成されると思われる。しかしこの主張は、現象的性質の存在条件が結合関係の成立にあるとすることになるため、現象的性質は物理学的に分析可能なものと見なすことになり、ラッセル的物理主義ではなく単なる物理主義になる。

そうではなく、内在的性質一般ではなく特定の内在的性質でなければ一定の結合関係に立ったときに現象的性質を実現しないとしてみよう。この場合、ラッセル的一元論が措定する「計り知れぬもの」は、現象的性質を説明するという必要上求められる特徴を持った内在的性質である、としなければならない。すなわち、現象的性質を説明するという目的と切り離して規定できる内在的性質ではない。そして現象的性質との関係上で規定される内在的性質が一切の具体物の存在に関わると主張することになるので、モンテーロの立場は通常物理主義者が受け入れ難い、汎心論に極めて近い形態の一元論であるというべきであろう。

以上の議論をまとめれば、ラッセル的物理主義は、RM の一種である以上、「計り知れぬもの」を物理学の理論によっては語られない、捉えられない性質としなければならない。しかしそのとき、「計り知れぬもの」は物理的性質であるとし、RM を一種の物理主義であるとしてその他の立場から区別することができなくなる。したがって RM の一種として支持することはできない。RM としては、汎心論か原 - 汎心論（汎質論）を支持すべきである。

4 汎心論と結合問題、そして汎質論へ

通常物理主義を退ける RM は、現象的性質が論理的に付随する基盤となる「計り知れぬもの」が経験の現象的性質を必然化する関係として、同一性関係か構成関係を想定せざるを得ない。ミクロな内在的性質がその

ままマクロな現象的性質になるとすることは理解しがたく、それゆえ同一性関係によって必然性を説明することはできない。そこで構成関係に訴えることになるが、ここで自然に浮かんでくるアイデアは、マイクロ物理的な存在の内在的性質である「計り知れぬもの」自身が一種の現象的性質であるとし、それがわれわれが意識するマクロな現象的性質を構成するとするものであろう。この場合、実在の基底的なレベルに心的側面が認められることになるため、一種の汎心論を支持することになる。

しかし汎心論を取ったからと言って、RMの立場として十分に説得力を持つものとなっているとはまだ言えない。それを明らかにするのが、汎心論に対する重大な問題とされる「結合問題 Combination problem」である。結合問題はもともとウィリアム・ジェームズが『心理学原理』において、経験の感覚内容が細かい要素から構成されているとする立場に対する批判として提起したものであり、マイクロ物理的存在が担う現象的性質がマクロな現象的性質を構成するという主張は理解しがたいことを指摘する。これが理解しがたい理由は二点ある。一つは、そもそも我々の現に有している現象的性質あるいは意識主体の概念からして、それらが結合して他の意識主体を構成するという事態は理解しがたいものであるという論点である。二点目は、かりに何らかの結合関係・構成関係を主張したとしても、それがマクロな現象的性質の存在を論理的に必然化する関係だとは見なせない、という論点である。

まず一点目について。現象的性質には、意識される質的内容だけでなく、それを意識する主体が伴っているように思われる。また質的内容は、意識主体ごとに異なるパースペクティブの中に定位されるものとして意識される、という構造を持つ¹⁴。こうした現象的性質の特徴の中でもとくに意識主体という要素が結合問題の解決を困難にする。

我々は日常的な経験において、自身を意識主体として認めるのみならず、自分以外にも多数の意識主体が存在していると認めている。しかし、この理解の際に使用されている意識主体の概念からすれば、複数の意識主体が融合し一つの意識主体になるということは理解しがたい。各主体の意識する内容はそれぞれのパースペクティブの内部に定位されるが、このパースペクティブは当の意識主体以外にとっては乗り越えがたい壁になっていると思われ、他者の意識する内容に、その他者のパースペクティブの外から意識するという仕方でアクセスすることも、あるいは複数のパースペクティブが融合し一つのパースペクティブを形成するという事態も、我々には理解しがたいことである。つまり、我々が現に有している現象的意識の概念からして、マイクロであれマクロであれ、複数の現象的性質あるいは意識主体が結合して別の現象的性質・意識主体を構成するとすることはナンセンスに思われるのである。

結合問題に関しては、現在この一点目に関して論じられることが多い。たとえばモンテローは、マイクロな現象的意識主体がそれぞれ互いに独立であるまま結合関係を持ち、マクロな現象的意識を構成すると考えることには何も問題がない、それは水素原子と酸素原子がそのまま結合して水分子を構成することと同様と考えてよいと主張する。これに対し、シーガーは、マイクロな現象的意識が融合してマクロな現象的意識になることが有意味に思考できるとし、フィリップ・ゴフは「現象的紐帯」関係を想定し、それがマイクロな現象的性質間に成立することでマクロな現象的性質が構成されると主張している¹⁵。これらのいずれが結合関係に関する仮説として良いかについては、本論文では検討しない。というのも、以上の説のいずれも、結合問題が解決困難である理由の二点目に関しては有効ではなく、根本的には解決策と認めがたいからである。

マイクロ物理的な出来事の内在的性質、「計り知れぬもの」として、マイクロな現象的性質が存在するとしたとする。このとき、それらマイクロ物理的な出来事の間には上述した結合関係のいずれかが成立しているにも関わら

¹⁴ それゆえ、この三つの側面それぞれに対し別個の結合問題を提起できる。Chalmers (2016b), p182. それらを「質についての結合問題」、「主体についての結合問題」、「構造についての結合問題」と呼ぶことにする。

¹⁵ Montero(2016), Seager(2016), Goff(2016).

ず、マクロな現象的性質が構成されないという事態を思考することができる。つまり、ミクロレベルで汎心論を採用したとしても、マクロな現象的意識に関するゾンビが思考可能であると思われるのである。ゾンビの思考可能性が現象的意識に関する通常の物理主義の誤りを示しているとするのであれば、同様に汎心論も現象的意識の問題の解決にはならないとすべきであろう。

ここで注目に値するのは、コールマンの見解である¹⁶。コールマンは、意識主体の概念が結合問題の解決を難しくしていることを指摘したうえで、そうした概念でとらえられると想定されている意識主体なるものは現象的性質にも「計り知れぬもの」にも伴っていないとする。コールマンはラッセルの面識概念を物理的に実装可能なものとするを旨とし、ある質が意識的なものになるのは、ある主体がそれを意識することによるのではなく、その質が高階の心的状態（これ自体は一種の脳状態として実現される）の対象となることによるとする。こうした理論が成立可能ならば、マクロな意識の主体なるものが存在すると認める必要はなくなる。マクロな現象的性質に意識主体が伴っていないのであれば、それを構成するミクロ物理的存在の内在的性質である「計り知れぬもの」にもミクロな意識主体を伴わせる必要はない。こうしてコールマンは、汎心論ではなく汎質論を提唱するにいたる。

現象的意識の内容として、質的特徴やそれが特定のパースペクティブ的構造の中に定位されていることは否定しがたいと思われるが、それを意識する主体やそれが働かせる意識作用までもがその内容になっていることまで同様に否定しがたいとは思われない。たとえば汎心論を支持するストローソンがミクロな質的特徴にはミクロな主体が伴うとするのは、経験とは何らかの主体にとっての経験であるということがアプリアリに真だという理由からであり¹⁷、意識主体の存在が現象的意識において所与として与えられているからではない。しかし、意識主体とは独立に質的特徴の存在をみとめる汎質論が整合的な立場として展開可能ならば、このストローソンの主張を認めなければならない理由はなく、また実際展開可能であると思われる。

汎質論は、意識主体の存在を否定することにより、結合問題の解決を難しくしている第一の理由を取り除くことができる。そして説明すべき構成関係から意識主体間の関係が外され、現象的意識の内容である質的特徴に問題が集中されることで、第二の理由に対しても解決の方向性を示唆することができると思われる。

赤い塗料と青い塗料を混ぜて紫の塗料にする場面の知覚経験を例としよう¹⁸。その知覚経験を、赤の塗料の知覚経験の現象的な特徴と、青の塗料の知覚経験の現象的な特徴とによって、紫の知覚の現象的な特徴が含意される経験として記述できると思われる。そして汎質論を支持するならば、この知覚経験の現象的な特徴間の関係の記述は、意識されることから独立に存在する性質間の構成関係の描写であると受け取ることができる。そしてこの赤、青、紫の現象的性質間の構成関係を、赤と青による紫の現象的性質の必然化であるとすることができる。

ここで次のような批判がなされるかもしれない。赤・青・紫それぞれの見え方である現象的性質間の構成関係が経験的に発見可能な法則的關係であるとすれば、紫の現象的性質は、赤の現象的性質と青の現象的性質との結合に論理的に付随しなくなる。というのも、ここで構成関係は経験的に発見されるものなので、それは紫

¹⁶ Coleman(2016) ; (2019) .

¹⁷ Strawson(2003b) は、主体であること・意識的であること・内容であることの三者が互いに含意しあうとし、一定の内容が意識されていることから、それを意識する主体が存在することがアプリアリに帰結すると主張する。しかしここで前提されている内容の概念は内在主義的であり、経験の外部とは独立にその内容が確定しているとされるものである。この概念を前提するならば、たしかに一定の内容であることは、誰かにとっての意識経験の内容であるという主張に説得力を認めることができる。しかし、現象的意識の質的特徴は例示された性質であると思われ、また経験の志向的特徴であると捉えることが可能な仕方を経験される。このとき、その内容が内在主義的に理解されるべきだとすることは決して自明ではない。たとえば現象的な質についての意識を「面識」のような二項関係の成立によって理解することも十分可能だと思われるし、その場合、現象的な質の存在は意識主体の存在を含意しない。

¹⁸ Coleman(2016)

の現象的性質をせいぜい法則的に必然化するものでしかなく、形而上学的に必然化しないはずだからである。したがって、赤の現象的性質と青の現象的性質とが結合しているが、紫の現象的性質が存在しないという状況が思考可能になり、依然として結合問題は解決されていない。

この批判に対しては、経験的に発見可能な法則的關係であることは、その關係が形而上学的に必然的な關係であることを必ずしも妨げない、と主張したい。たとえば物理的性質が本質的に傾向的であり、因果的力能であるとする「傾向性主義」の立場¹⁹では、ある性質にとって、それがほかの性質と現にある法則關係にあることは、形而上学的に必然的である。そして科学はこのような法則を発見することを目的とする探究であるとする。この見解に従うなら、赤と青の現象的性質が結合することによって紫の現象的性質が生じることは、それらの現象的性質にとって形而上学的に必然的であることになる。これと同様の關係がマイクロ物理的存在の内在的性質とマクロな現象的性質との間に成立するとすることで、質の結合問題は解決することができる²⁰。

このように、汎質論は汎心論よりも結合問題の解決に一歩近づいているものと評価できる。では汎質論自身にはいかなる問題もないのだろうか。それを検討するために、コールマンの汎質論を具体的に検討してみたい。

5 汎質論の困難

コールマンは、マイクロ物理的対象が担う「計り知れぬもの」である質は、意識されることから独立に存在するものとして理解することが可能だとし、汎質論を支持する。汎質論の立場によれば、質はあらゆる物理的存在の内在的性質として実在しているが、意識されるのはそのうちのごく一部にすぎない。そのため、汎質論は主体によって意識されるということを用いずに意識される質とされない質を区別しなければならないが、ここでコールマンはローゼンタールの説に示唆を受けた一種の高階思考説を提案する²¹。外部環境や身体と一定の因果關係に立ち、一定の機能を有する脳状態が感覚状態であり、その内在的性質が感覚の質的内容となるが、それ自体としては意識的状态ではない。この感覚状態が意識的状态となるのは、同じ脳の思考という状態の対象となるときである。ただしローゼンタールの高階思考説が、思考とその対象となる心的状態の間に前者が後者を因果的に惹き起こし、逆に後者が前者を表象するという關係を主張するのに対し、コールマンは、高階思考と感覚状態は全体と部分の關係にあるとする²²。意識的な感覚状態は一階の感覚状態とそれに対する気づきとして機能する要素の組み合わせからなるが、後者の要素には一種の「スロット」が空いており、そこにそれ自体としては意識的ではない感覚状態が埋め込まれる、あるいは「引用」されるとする。ローゼンタールの高階思考説では、感覚状態とそれについての思考状態は別個の状態であり、意識の質的内容は思考状態の表象内容であるが、コールマンの理論では感覚状態は高階の心的状態の構成要素となり、それ自体が意識の質的内容

¹⁹ 物理的性質が本質的に傾向的とする論者の中でも、たとえば Ellis (2012) は傾向性の定言的基盤である「本体 Quiddities」の必要性を主張している。ただし、そこで「本体」とされている定言的な性質は距離などの空間關係であり、ラッセル的一元論では「構造的性質」に当たる。それゆえ、さらに空間關係などの構造的性質が存在するためには、その構造を満たす何らかの内在的性質が必要であることを示して、彼の「新本質主義」とラッセル的一元論を接合することが必要である。

²⁰ このように、経験的に発見された法則的關係が形而上学的に必然的でありうることは、本論文で使用した思考可能性論証や、知識論証による物理主義の批判の効力を弱めてしまうと思われる。というのも、一般的に思考可能性から形而上学的可能性を導出可能とは言えなくなるからである。しかし RM の場合、物理学についての構造主義を正当化したうえで、「物理学的探究がどれだけ進んでも、關係的・構造的性質や傾向性に関する物理学的真理が現実世界と同一であるにもかかわらず、内在的で定言的な性質であるマクロな現象的性質が存在しないことは思考可能である」という限定的な主張をする道が残されている。さらに、註 6 で述べたように、思考可能性論証や知識論証に訴えずに RM を導入することも可能である。

²¹ Coleman (2019). ここでコールマンがその成立を説明するのは、意識的な感覚状態の成立であり、自分が何かを意識しているという自覚を伴った意識状態や、そうした意識状態に含まれる気づき awareness に対する意識を含まない。

²² Coleman (2019).

となる。コールマンはこれを「引用高階思考 (QHOT: Quotational Higher order thought) 説」と呼ぶ。

汎質論は、主体がマイクロ物理的存在者に伴わないとするので、そもそも主体についての結合問題に悩まされることはない。また前節で述べたように、質についての結合問題についても解決策の提案をすることができる。問題は、構造についての結合問題である。たとえば、マクロな経験に備わるパースペクティブ的構造はいかにして成立するのだろうか。我々の視覚の内容は、自分の身体を原点とし、上下・左右・奥行というパースペクティブ的な空間構造を持っており、その構造の様々な領域に色の見え方を代表とする現象的質が定位されているものとして経験される。こうした経験の現象的内容が脳を構成する物理的出来事の内在的性質から構成されるとき、パースペクティブ的な空間構造そのものはいかにしてもたらされるのだろうか。

この問題の難しさは、経験の現象的内容が持つ空間的構造がパースペクティブ的であるのに対し、脳を構成するマイクロ物理的出来事の間で成立する空間関係は非パースペクティブ的だという点にある。脳を構成する物理的出来事の内在的性質が非パースペクティブ的な空間関係によって配列されることで、なぜ経験の現象的質の間のパースペクティブ構造が構成されるのだろうか。

この問題に対してコールマンは、マイクロな現象的質は、その担い手であるマイクロ物理的出来事間で成立する物理的空間関係ではなく、そうした出来事が経験として機能しているときのその表象内容となっている構造に即して配列されるとする²³。コールマンによれば、視覚系は多重化した引用高階思考からなる入れ子状の階層システムとして成立しており、そのシステムを構成する下位の状態の内在的性質と志向的内容の組み合わせとして、最終的な知覚状態が成立する²⁴。脳を構成しているマイクロ物理的出来事は、「計り知れぬもの」である内在的性質のみならず、傾向性も持っている。この傾向性が原始的な志向性に相当するが、この傾向性の定言的基盤となっているのは内在的性質である「計り知れぬもの」であるのだから、「計り知れぬもの」が感覚における原始的な志向性の基盤となると言ってもよい²⁵。そして、複数のマイクロ物理的出来事が入れ子状の階層システムの下位状態となり、それらから知覚経験として機能する脳状態が構成されているとき、マイクロ物理的出来事の傾向性の総和は、経験が客観的空間とその中の諸対象を表象する作用となっている。この表象の志向的内容は、パースペクティブ構造を持つ自己中心的空間の様々な領域に諸対象が定位されているものとして、実在を捉えるものとなっている。この志向的内容の構造に即して、その成立に寄与した下位状態の内在的性質である「計り知れぬもの」が結合されることにより、経験の現象的内容そのものが構成されれば、構造についての結合問題は解決されることになる。しかしこの見解は、意識に関するコールマンの見解を組み合わせるとき、構造についての結合問題を解決することに失敗すると思われる。

たとえば立方体の対象を意識的に知覚する経験を例にしよう。我々がその対象を知覚するとき、その対象が立方体であることが意識されている。しかしその経験の現象的質、すなわち立方体の特定の見え方は、立方体のすべての面の質的な与えられ方を含んでいるわけではない。多くの場合、三つの面が現象的に与えられている一方で、残りの面は現象的には与えられていない。また立方体を知覚しているとき、我々はその各面が同じ大きさ・形の正方形であることも理解しているが、各面の現象的な与えられ方はそれぞれに異なっている。にもかかわらず、われわれがそのような与えられ方を通じて立方体を知覚するのは、今現にいる地点からのその立方体の見え方、現象的な与えられ方のみならず、別の地点から見たときの同じ立方体の異なる見え方、異なる現象的な与えられ方を意識しているからである。左右に移動したり、あるいは立方体の上下をひっくり返したときにどのように見え方が変化するかを了解しているからこそ、我々は今現に与えられている現象的な質的内容を「立方体の与えられ方」として受け取ることができるのである。

²³ Coleman(2016).

²⁴ Coleman(2019), pp64-71.

²⁵ Coleman(2019), p68.

この「現にいるのではない地点からの見え方、対象の与えられ方」は、顕在的な注意の対象となっていないにせよ、立方体が意識されている以上、その一部として意識の内容となっているはずである。ここで、コールマンによる意識の説明である引用高階思考説を前提するならば、最終的に立方体が意識的に知覚されている以上、意識的知覚を構成する下位状態の中には、現在いる地点から視覚的に得られている感覚内容を内在的性質とする感覚状態のみならず、異なる地点からの可能な見え方を表象する状態も含まれているはずである。そしてこの後者の状態の内在的性質も、意識的知覚状態を構成する部分である以上は意識されているはずである。だとすると知覚者が知覚するときに、複数の視点から同じ立方体を同時に見ているような経験をするようになる。しかし知覚経験において現に与えられた質として意識されているのは、今現に見ている位置からの見え方のみである。コールマンの見解は、このような知覚における明白な現象学的事実に反している。

ここで、引用高階思考説をより詳細に展開して、意識されていることを最終的に成立する意識的知覚の部分となることとしつつも、それと顕在的な注意の対象になることを何らかの仕方で区別することで、以上の難点は克服できると主張されるかもしれないが、それは上手くいかない。というのも、現にある地点から立方体を知覚しつつ、「もしここから立方体の右側に移動したらどのように見えるだろうか」と考え、そのときの見え方を顕在的な注意の対象とすることも可能だからである。しかしその場合でも、注意されているのはあくまで可能な見え方であって、現にいる地点からの立方体の見え方のように質として与えられているわけではない。なにより、現に与えられている質は例化された性質であるのに対し、可能な見え方は例化された性質として意識されているわけではない。

まとめれば、コールマンは表象内容の構造に訴えることによって結合問題を解決しようとするが、逆に脳を構成する物理的出来事の内在的性質の間で、意識されるものとされないものとの区別ができなくなっているのである。

6 素朴实在論の方へ

これまで RM が結合問題を解決する道筋を検討してきたが、最も有望と思われる汎質論においても、構造に関する結合問題が難問として残ることが確認された。RM の立場に立ちつつ、構造についての結合問題を解決することはできないのだろうか。これまで考察してきたものとは大きく異なる立場としてなら、ありうると思われる。

これまで検討してきた RM はすべて、「計り知れぬもの」を人の脳状態を構成する出来事の内在的性質とすることを前提している。現象的性質が意識されることから独立に理解できないなら、現象的質は経験の内在的性質とするべきであり、この前提はもっともらしい。しかし汎質論が RM の一種でありうるなら、RM がこの見解を取らなければならない理由はない。またその定義からしても、RM であるために求められる条件は、物理学に関する構造主義と、「計り知れぬもの」の实在性および経験関連性、この二点を認めることであって、「計り知れぬもの」を脳状態を構成する出来事の内在的性質と見なさなければならない理由はない。

仮にパースペクティブ構造が客観的な空間の特徴であるとし、その中に現象的質が定位されるとするならば、現象的質は脳状態を構成する出来事の内在的性質とするのではなく、主体がいる環境内の状態や知覚対象となる物体の内在的性質とすることができる。たとえば視覚経験の現象的質、色の見えに関しては、知覚対象となる物体表面の性質であるとする、つまり一種の素朴实在論を採用することができる。

我々は物体が定位される三次元の空間について、特定の視点位置からのものではない了解、無視点的な了解を持っている。これが客観的かつ实在的な空間把握であり、パースペクティブ的構造はこの客観的な空間を表象する一形式にすぎないとされがちであるが、パースペクティブ的構造の实在性を認めるならば、この無視点

的に把握された空間の各地点から、パースペクティブ的構造をもった空間が、意識とは独立に開けているとすることになる。こうした見解を主張する論者として、センスデータから外界を構成しようとしていた時期のバートランド・ラッセルを挙げることができる²⁶。

センスデータから外界を論理的に構成しようとしていた時期のラッセルは、センスデータと同様に現象的質の担い手でありながらも意識されない存在者であるセンシビリアを認める点で、一種の汎質論を採っていると言える。ラッセルは、実在の空間構造は三次元ではなく、客観的な空間とされる三次元の各点からパースペクティブ性を持つ三次元の空間がさらに開けるという構造をしているとし、その各パースペクティブ内の一領域にセンシビリアは位置づけられる。このとき、我々が通常、物体を知覚しているときの「見え」と見なすセンシビリアは、「知覚者の位置から見た物体表面の位置」にあるとされる。

視覚の場合、物体の特徴はそれに近づくほうが細かく正確に知覚される。この事態は、物体が定位される位置により近い視点から開けているパースペクティブほど、その物体の見えとされるセンシビリアはより大きく、より複雑な構造を持つこととして理解される。そして物体の位置と視点の位置を近づけていった極限的なパースペクティブにおけるセンシビリアをラッセルは「物質 matter」であるとする。こうしたラッセルの物質観に基づけば、究極的なマイクロ物理的存在者は「物質」であるセンシビリアの系列とされ、そのセンシビリアの担う現象的質こそ、マイクロ物理的存在者の内在的性質、「計り知れぬもの」であることになる。

ラッセルのパースペクティブ論を受け継ぐなら、「計り知れぬもの」と経験される現象的質の間にマイクロ・マクロな構成関係を認めるとしても、パースペクティブ間にも構成関係を認めなければならなくなるわけではない。「計り知れぬもの」が定位されるパースペクティブと経験される現象的質はマイクロ・マクロ関係にはない、同じレベルのパースペクティブであると見なすことが可能である。実在する空間そのものにパースペクティブ構造が備わっているとすることで、このように構造に関する結合問題は解決することができる。

7 おわりに

これまで提案してきた解決策も、もちろん多くの解決すべき問題を抱えている。たとえば客観的空間そのものがパースペクティブ構造を備えるとするとき、物体・身体はどのようなものとして理解されるべきか。その内部で身体と知覚対象とが空間的に接触していないとしつつ、現象的性質の意識をどう説明すればよいのか。それが二元論とは違い物理的なものの因果的閉包性と両立可能でありうるか、などの問題である。これらの点については今後の課題としたい²⁷。

参考文献

- Alter, Torin, and Yujin Nagasawa. 2012 “What Is Russellian Monism?” in *Journal of Consciousness Studies* 19, n. 9-10, pp67-95.
- Alter, Torin, and Yujin Nagasawa. 2015 *Consciousness In The Physical World*. Oxford: Oxford University Press.
- Bruntrup, Godehard, and Ludwig Jaskolla. 2016 *Panpsychism : Contemporary Perspectives*, New York:

²⁶ Russell(1914a): (1914b).

²⁷ 本稿は、応用哲学会第11回年次大会(2019年4月20日、於京都大学吉田キャンパス)での発表「素朴实在論としてのラッセル的一元論」に加筆修正をしたものである。発表時にご批判をくださった方、また Nagoya Journal of Philosophy の査読者の方に感謝する。また本稿は JSPS 科学研究費助成(課題番号 17K02190)による研究成果である。

- Oxford University Press.
- Chalmers, David. 2010a “The Two-Dimensional Argument against Materialism,” in Chalmers(2010b), pp141-206.
- Chalmers, David. 2010b *The Character of Consciousness*. Oxford: Oxford University Press.
- Chalmers, David. 2016a “Panpsychism and Panprotopsychism,” in Bruntrup, and Jaskolla(2016), pp19-47.
- Chalmers, David. 2016b “The Combination Problem for Panpsychism,” in Bruntrup and Jaskolla(2016), pp179-214.
- Coates, Paul and Sam Coleman. 2015 *Phenomenal Qualities*. Oxford: Oxford University Press.
- Coleman, Sam. 2012. “Mental Chemistry: Combination for Panpsychist, ” in *Dealectica 66-1* (2012), pp137-166.
- Coleman, Sam. 2015. “Neuro-Cosmology, ” in Coates and Coleman(2015), pp66-102.
- Coleman, Sam. 2016 “Panpsychism and Neutral Monism: How to Make up One’ s mind,” in Bruntrup, and Jaskolla(2016), pp249-82.
- Coleman, Sam. 2019 “Natural Acquaintance,” in Knowles and Raleigh (2019), pp49-74.
- Ellis, Brian. 2012 “The Categorical Dimensions of Causal Powers” in Ellis, B and Sankey, H.(eds.) *Properties, Powers and Structures*. Oxford: Routledge, 2012, pp
- Goff, Philip. 2017 *Consciousness and Fundamental Reality*. New York: Oxford University Press, 2017.
- Knowles, Jonathan and Thomas Raleigh. *Acquaintance: New Essays*, Oxford: Oxford University Press, 2019.
- Lewis, David. 2009 “Ramseyan Humility,” in David Braddon-Mitchell and Robert Nola(eds.) *Conceptual Analysis and Philosophical Naturalism*, Cambridge: MIT Press, 2009, pp.203-22.
- Montero, Barbara. Gail. 2015 “Russellian Physicalism,” in Alter and Nagasawa(2015), pp209-23.
- Montero, Barbara. Gail. 2016 “What Combination Problem?” in Bruntrup and Jaskolla(2016), pp215-228.
- Nagasawa, Yujin. 2008 *God and Phenomenal Consciousness*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pereboom, Derk. 2011. *Consciousness and the Prospects of Physicalism*. New York: Oxford University Press.
- Rosenburg, Greg. 2004. *A Place for consciousness*. Oxford: Oxford University Press.
- Russell, Bertrand. 1914a *Our Knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy*. Chicago and London: Open Court.
- Russell, Bertrand. 1914b “The Relation of Sense-Data to Physics,” in *Scientia 16*(1914), 1-27 and supp.3-34. Reprinted in *Collected Papers of Bertrand Russell vol.8 :The philosophy of Logical Atomism and Other Esseys, 1914-19*. Slater, J.G.(ed.) London: George Allen & Unwin. 1986., pp3-26.
- Russell, Bertrand. 1927a *Analysis of Matter*. London: Kegan Paul.
- Russell, Bertrand. 1927b *Outline of Philosophy*. London: George Allen and Unwin.
- Seager, William. 2016 ”Panpsychist Infusion,” in Bruntrup and Jaskolla(2016), pp229-248.
- Stoljar, Daniel, 2001. “Two Conceptions of the Physical,” in *Philosophy and Phenomenological Research 62* (2001) : 253-270.
- Stoljar, Daniel. 2006. *Ignorance and Imagination: The Epistemic Origin of the Problem of Conscious-*

ness, New York: Oxford University Press.

Strawson, Galen, 2003a. “Realistic Materialism,” in L. Antony and N. Hornstein(eds.) *Chomsky and his Critics*, Oxford: Blackwell, 2003, pp19-51.

Strawson, Galen, 2003b. “What is the Relation Between an Experience, the Subject of the Experience, and the Content of the Experience, ” in *Philosophical Issues 13*, pp.279-315.

Strawson, Galen, 2006. “Realistic Monism,” in A. Freeman(ed.) *Consciousness and Its Place in Nature*, Thorverston, England: Imprint Academic, 2006, pp3-31.